

これらの点と全体をみた上で、分類整理した結果は次の通りである。

- ① 両面写経の場合は、一般的な二〇本一把を必ずしも厳守していないものもある。但し片面写経は一把の本数は不詳。
- ② 卷数・品題は法華経に該当し、他の経文は入っていない。
- ③ 広幅片面写経は校正が施されており、「皆校」「校」の記入がある。他の二種類も校正されてはいるが、整然としたものではない。
- ④ 番号記入がところどころ見受けられる。後の作業、例えば大把にする時などの煩を避けるためであろう。
- ⑤ 同じ経文を書いたものは細幅両面写経は二点、広幅両面写経も二点ある（細幅片面写経は数が少なく不詳）。このことから法華経の大把は四つ以上あつたと推定されるが、実際の出土量は少なく腐蝕が進んでいるという事実は否めない。

なお、細幅両面写経に「南無阿弥陀仏」と六字名号が記入されたものが四点ある。

9 関係文献

滋賀県教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-15-1』（一九八二年）

同『昭和五七年度滋賀県文化財調査年報』（一九八四年）

（石橋正嗣（安土町教育委員会）、河内美代子（近江八幡市立郷土資料館））

岐阜・鷺山蟬遺跡

さきやませみ

所在地 岐阜市大字鷺山字西蟬

2 調査期間 二〇〇三年度調査 二〇〇三年（平15）六月～二〇〇四年三月

3 発掘機関 (財)岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

4 調査担当者 朝田公年

5 遺跡の種類 集落跡・城下町跡

6 遺跡の年代 古代～戦国時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(岐阜)

鷺山蟬遺跡は独立小丘陵

鷺山の東、長良川の北、鳥羽川の南に位置する扇状地上に展開する鷺山遺跡群を構成する遺跡の一つである。

区画整理事業に伴い、二〇〇三年度から順次発掘調査を実施している。古代から戦国時代にかけての複合遺

跡であるが、主に奈良時代、鎌倉時代から室町時代まで、及び戦国

時代前半の遺構が中心である。

当遺跡では蟬土手城館跡と呼ばれる一辺一二〇m規模の方形の城館跡を確認しており、その城主として美濃國守護土岐政房の子息、あるいは重臣クラスが推定されている。また当遺跡の東、現在福光と呼ばれる地域は、守護土岐政房が永正六年（一五〇九）から天文元年（一五三三）までの間、守護所を移したとの記録があり、福光城推定地に比定されている。蟬土手城館跡の調査では、幅約七m深さ約二一・三mの堀と土塁を確認しており、記録とほぼ同時期の一六世紀前期の遺物が多数出土している。

今回木簡の見つかった鷺山蟬遺跡A-1調査区は、蟬土手城館跡の西約一〇〇mに位置する。当調査区でも屋敷跡と考えられる遺構が見つかり、建物跡のほか屋敷を区画する幅約四m深さ約一・五mの堀と、入口に相当する土橋を確認した。この土橋に近接する溝の下層から、木簡一点（将棋の駒）が出土した。他に土師器皿多数、古瀬戸製品、漆器椀・折敷・箸などの木製品、貝や獸骨といった食物残滓が良好な状態で出土している。これらの出土遺物も、先述の蟬土手城館跡、及び福光城推定地とほぼ同時期の一六世紀前期のものである。また当調査区の屋敷跡は、規模としては及ばないものの、遺物の組成からみて、蟬土手城館跡と同じ守護所に関連する屋敷跡の一つといえよう。

8 木簡の釈文・内容

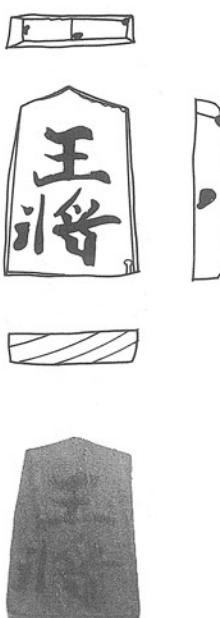
(1) 「王将」

将棋の駒の完形品で、肩幅は一七mm、表面の墨書が明瞭に見て取れる。表面の文字以外に先端部側面及び右側面に墨点が計四カ所みられ、駒の動く方向を示すものと考えられる。本来は全部で八カ所にあつたと考えられるが、肉眼観察ではこれら以外に確認できなかつた。樹種はヒノキ科アスナロ属（ヒバの一種）である。

9 関係文献

岐阜県教育委員会『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第一集（岐阜地区・美濃地区）』（一〇〇三年）

（朝田公年）



31×22×5 061